

特別講演

ネオ古典地理学をめざして

——「外野席」の地理学——

水 津 一 朗

- I. はじめに
- II. ラッツェルの遍歴
- III. ラッツェルの青春
- IV. 『種の起原』初版原本
- V. ダーウィンにおける裂目
- VI. 第2の「大航海時代」
- VII. 『下ライン考』
- VIII. 『自然考』
- IX. 日本の北辺
- X. 有機的自然観
- XI. ヘルダーとゲーテ
- XII. 『若きヴェルテルの悩み』
- XIII. ネオ古典地理学への道

1. はじめに

学長就任以来地理学研究をはなれて5年に近く、地理学の「外野席」に移った想いが強い。

前任大学では学部長2期の経験があるが、学部長は講座を担当し、学部を離れる必要もなかった。ところが学長には、学部はおろか、教授の席も定かではない。しかも、学部長とは比較にならないほど大学行政上の実務が多い。教学理念の具象化、学部・学科間の調整といえば、万能の哲人のような重責だが、現実にはどろどろした、なんとも表現しようのない苦境におちこむこともある。

私の好きな20世紀前半の地理学者にグラートマン(R. Gradmann)がいる。チュービンゲン大学図書館司書からエルランゲン大学地理学教授になったときのよろこびを、「青虫が蝶に飛びたった」ようだと『自叙伝』に書いている。名著『南ドイツ(Süddeutschland)』を完成したのは、そ

の直後だった。つづいて、「中心地理論」のクリスタラー(W. Christaller)に学位を授与している。

私は学長就任当初、「蝶が青虫になって這いまわるようだ」と感じた。とはいっても、全学の学生たちや教職員、ときには公開講座などで市民の前で抱負を述べるとなると、それ相応の準備がいる。入学式や卒業式での式辞は、その代表的なものであるが、大学広報や後援会誌、クラブ誌などへの数百字の原稿依頼も、意外に多い。

大学の自己変革が要請されている今日、通り一遍の訓辞や、平素あまり考えたこともないスローガンの受けうりでは、学長のリーダーシップは保てない。世俗化はさけて、迫力あるものにしようとするれば、いきおい年季のある専門を踏まえて、一家言述べなければならぬ。こうして、疎遠になったはずの古巣に、意外なところで押し戻される。この点からしても、「外野席」の地理学者を自称するのを許していただきたい。

しかし相手は、ほとんど地理学には直接の関心がない。地理学にベースをおくといっても、その内容は、青春の歩みや友情、人生や思想の遍歴など、カレッジライフの一断面とどこかで結ばれたテーマにしぼられる。こうした話題となると、時の思潮をリードした、スケールの大きい古典地理学の巨匠たちをめぐるエピソードにかぎられやすい。20世紀には狭い専門的な話題はあっても、ヘットナー(A. Hettner)の学生時代の地理教室遍歴やナチズムと地政学との悲劇などを除くと、一般うけするドラマに乏しい。

ここではテーマを、式辞に利用した古典地理学の挿話にしぼり、「外野席」の経験から、あえ

表 古典地理学の年譜 (本稿に関係するものに限る)

1744	J. G. Herder 誕生
1749	J. W. v. Goethe 誕生
1754	G. Forster 誕生
1765~68	Goethe ライプツヒ大学
1769	A. v. Humboldt 誕生 Herder : <i>Das Meer in Journal meiner Reise in Jahr 1769.</i>
1770~75	Goethe ストラスプール大学
1773	Herder : <i>Abhandlung über den Ursprung der Sprache.</i>
1774	Goethe : <i>Leiden der jungen Werthers.</i>
1778	Forster : <i>Reisen um die Welt während der Jahren 1772 bis 1775.</i>
1779	C. Ritter 誕生
1784~91	Herder : <i>Das Klima in :Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit.</i>
1788	Humboldt 日本渡航を希望
1790	Forster : <i>Ansichten vom Niederrhein.</i>
1799~1804	Humboldt 中南米学術探険
1808	Humboldt : <i>Ansichten der Natur.</i> 間宮林蔵サハリン踏査
1809	C. Darwin 誕生
1810	高橋景保 :『新訂万国全図』
1821	伊能忠敬 :『大日本沿海輿地全図』
1822~59	Ritter : <i>Erkunde in Verhältniss zur Natur und zur Geschichte des Menschen.</i>
1830	Goethe : <i>Dichtung und Wahrheit—aus meinem Leben.</i>
1836~48	Eckermann : <i>Gespräche mit Goethe.</i>
1831~36	Darwin の H. M. S. Beagle 号航海
1844	F. Ratzel 誕生
1859	Humboldt と Ritter 死去 Darwin : <i>On The Origin of Species.</i>
1869	Ratzel : <i>Sein und Werden der organischen Welt.</i>
1882~91	Ratzel : <i>Anthropogeographie.</i>
1888	Ratzel : <i>Die Entwicklung der Naturgefühls. Die Grenzboten 97/11</i>
1889	Ratzel : <i>Karl Ritter. Allgemeine Deutsche Biographie. 78</i>
1897	Ratzel : <i>Politische Geographie.</i>
1903	Ratzel : <i>Der Naturgenuß, Glauben u. Wissen, 1.</i>
1904	Ratzel : <i>Über Naturschilderung.</i>
1905	Ratzel : <i>Glückinseln und Träume.</i>
1931	R. Gradmann : <i>Süddeutschland.</i>
1958	N. Barlow(ed.) : <i>The Autobiography of Charles Darwin, with original omissions restored.</i>

て地理学史のみなおしにもふれてみたい。

II. ラッツェルの遍歴

平成2年の卒業式では、19世紀後半のラッツェル(F. Ratzel)をとりあげた(奈良大学広報、平成2年卒業式号)。古典地理学と20世紀地理学の接点に立つといわれる彼には、晩年の作に自叙伝『幸福の島と夢(*Glückinseln und Träume*)』がある。その変化にとんだ人生彷徨と思想遍歴のあとをたどって、第二の人生の岐路に立つ卒業生たちが、いま一度青春の軌跡を回顧して、門出の決意を新たにすることを求めた。

ラッツェルは少年時代、薬局見習いで薬草栽培に興味をもった後、ハイデルベルク大学で生物学を専攻する。ミミズの研究成果を卒論に書いてケルン新聞社に入社、世界各地を取材旅行してジャーナリストの才を発揮し、晋仏戦争にも従軍した。国外を取材旅行して、場所ごとの多彩さを感じたが、とくに中北米探訪の際、開拓者の風土にひかれて生物学から地理学研究に転じ、ミュンヘン大学をへてライプチヒ大学地理学教授となる。

以上のように彼は、異色の経歴の持ち主だったが、その地理学もまた、きわめて独創的である。

さてフンボルトとリッターが死去した1859年には、ダーウィン(C. Darwin)の『種の起原(*The Origin of Species*)』が出版され、進化論が世に流行する。生物学専攻時代のラッツェルもその影響をうけ、人間を徹底して生物進化の延長線上で考えるクールな生物一元論の立場にかたむく。彼の初期論文には、たしかに生物学的一元論の色彩が濃いのが、同時に芸術的・哲学的考え方も混じっている。しかも年がたつにつれて、「有機的自然観」(後述)に立つ前代のリッター(C. Ritter)地理学にひかれただけでなく、自然哲学に沈潜し、ヘルダー(J. G. Herder)の地理思想にもさかのぼっていく。

地表上には、人間を始めとする生物界の、それぞれ独特の生活様式をもつ集団(*Lebensformengruppe*)群が展開するひろがりとして、生活

空間(*Lebensraum*)の重層と並存がある。その「生活空間」をはじめて体系化しようとしたのが彼であった。また、人やものの移動によって、さまざまな領域における位置の役割が変化する。そのことを、組織立って論じたのも、彼をはじめとする。

彼はまた、地表上には雑多に変化する偶発の現象とともに、「くりかえしおこる現象」があるとして、その必然の現象と領域との特徴的な関係に注目したが、ここにはリッターの「地理学における史的要素」の本質につながるものがある。

現代地理学ではとかく見のがされているが、「心の中の領域」についても、リッター・ラッツェル・バンゼ(E. Banse)とつながる旧流があり、ラッツェルの「領域のイメージ(*Raumauffassung, Raum in der Geist*)」が、デュルケーム(E. Durkheim)の宗教社会学の有力なヒントとなったことも、特筆に値する。

ここには一見、矛盾する2つの立場が混っている。これはどうしたことだろうか。このことを解く鍵を、実は上述の自叙伝に探ることが、スピーチの焦点だった。吉田敏弘氏の厚意による稀観書のプリントを、寸暇をさいて邦訳することから、事は始まった。

III. ラッツェルの青春

『自叙伝』によると、すでに少年時代の彼は、大地の奥に小人や森の精がすむメルヘンの世界を夢みたり、また野外の観察が好きで、ミミズなどの生存競争を眺めて、幼な心に進化論の芽をかぎとったという。生まれつきの「自然児」の特徴が、はやくもあふれている。

大学入学前の18才前後、薬局見習いだったある夏の日のこと、彼は4才下の美しい姪のルイーゼに会う機会があった。2人は馬車にのって走っていた。

「若い少女が車の受け台によりかかり、手をさしのべているのは、すばらしい光景だった。道傍のブナの木のもとには、アネモネとサクラ草が群がっていた。私はいちばん美しいサクラ

草をひきちぎって少女にさし出そうとしたが、少女はそれを拒んだ。……彼女は、『カミさまのつくったかわいい花よ。そのままにしておいて』といった。こんな大切なことを、いままで自然史の先生も、いってはくれなかった。私はまじまじと少女を眺めた」

「ある夕方、咲いたばかりのナデシコを指さして彼女に語りかけて、『君は、白よりも白く、雪よりも白くみえる』といった」

「その翌朝のこと、少女は夕べの答えのように、ナデシコをうまく口にくわえて私の方によってきた。」

すべては「金蓮花のサラダのように未熟な二人のあいだ」と記されているが、まさにここには本人の、少年時代から変わらぬ自然とのふれあいが、叙情詩のように印象深い。

しかし大学入学後には、変化がみられた。そこには、ダーウィンの考え方の影響がはっきりと目立つ。

「学ぶのが楽しみだった青年時代、私にとってゲーテや美学に対立するのが、より健全で、より自由なことにみえた。当時私は、心の問題をたんに工芸品を考えるのと同じだとみるような生活をしてきた。ゲーテの美しい詩の結晶は精読したものだが、しかし『ヴェルテルの悩み』（後述）については、私の生まれつきの気質からして、赤面するほど女々しいと感じた」

いかにも進化論にとりつかれた若者らしい発言だが、彼は詩や小説を否定しているのではない。ヴェルテルのように激情におぼれて健全さを失うことの弱みをついているのである。晩年の彼は、若人たちを「自然と生命の子」とよぶ。その若者たちに「静かに植物のように成長した原初の詩 (elementare Gedichte)」のすばらしさがあることを、みずからも体験している点では、むしろ後述するゲーテ本来の精神、「自然享受 (Naturgenuß)」の姿勢に近い。ラッツェルは、「青春は生きた詩である」とも、「青春ははるか彼方の青い山脈である」とも回顧している。

自叙伝から察するに、ラッツェルは生まれつきヒューマンで、感受性にとみ、すでに少年時

代から大地と人間とが本来一体という体験をずっと身につけていた。そこに大学時代、生物学的一元論が、外からダーウィンやヘッケル (E. Haeckel) によってインプットされたにすぎない、と考えたい。こうした地表とのかかわりが、彼の成長とともにさまざまに変化し、深化しながら、終生、彼の地理学をユニークに彩りつけたのであろう。

したがって、現代思潮が自然と人間とを対置して考え、それ故に自然破壊につながる持病をもつのに比して、彼の考え方ははるかに健全である。式辞では、卒業生たちがラッツェルの青春をかみしめながら、新時代にふさわしい自然と人間とのバランスを、それぞれ汚れなき「詩と真実」の中から探りあてて欲しい、と最後を結んだ。

IV. 『種の起原』初版原本

通説ではラッツェルは、ダーウィン説に汚れた自然環境決定論者であり、人間の Erdgebundenheit (従来、地的束縛性と訳された) を強調する宿命論者と誤解され、とくに第二次世界大戦後は学界の「外野の特別席」におしこめられた感が強い。

しかし彼の Erdgebundenheit とは、たんに「地表と結ばれていること」であり、少年時代からの体験をもとにした人間本来のあり方の表現にすぎない。大地 (Boden) や地表と狭義の自然との粗雑な混同はさけるべきであろう。

ラッツェルは、大地と人間集団とが典型的にうまく一つに組織され、とけ合っている場合、その場所を「領域有機体 (Raumorganismus)」と呼び、そこに人間の営造物とその痕跡としての文化景観がつくられ、持続するという。まさに上述の「生活空間」群が重層し並存する領域上に、「調和」概念が添加された。しかし、大地と人間集団とがうまく「とけ合う」とか、「とけ合わない」とはどういう状態か、と問いつめると、ことはあいまいになるが、これはラッツェルの責任ではない。私自身学生たちの前で、「地域の調和」を期待しながら、いまでも内心では

「調和」とか「不調和」とは一体なんだろう、と考えこむ。ここには、現代科学の重大な盲点がある。

ラッツェルにも欠点はある。パルチュ(J. Partsch)が「精神の児の高い飛躍(hohe Flug seiner Geisteskinder)」というように、彼にはジャーナリスト特有の誇張がないわけではない。地理学界はいままで、彼のそうした負い目ばかりを過度に批判するあまり、その長所を今風に深めることを怠りすぎたのではあるまいか。

新しいラッツェル像との整合性を求めて、ありのままのダーウィンを「外野席」の気軽さで再評価できたら、と思うようになった。

こうした脈絡の中で、平成3年の入学式の挨拶では、奈良大学所蔵の『種の起原』初版原本を壇上にして、既成概念に抗すべき大学の本質ともからめながら、ダーウィンの知的彷徨の跡をたどってみた(奈良大広報、平成3年入学式号)。

本書は、1250部出版されたベストセラーの一冊。神が万物をつくったという神学的世界観を打破した本書には、岩波文庫版をはじめ、すぐれた邦訳がある。なにも初版原本をみるまでもないと疑問を抱く新入生も少なくないかもしれないが、実はそうではないと強調した。

本書が、<生存競争(struggle for life)><淘汰(選択, natural selection)><適応(adaptation)>を柱とすることは周知のところであろう。しかし具体的な内容は、版をおうて改訂増補され、とくに第5版以降、スペンサー(H. Spencer)の<適者生存(survival of the fittest)>の考え方をとりいれているし、また後世の初版復刻本には、初版以外の版によって補正された部分もある。ラッツェルも、少なくとも初期には、この第5版は知らなかったのではあるまいか。

ところで、とくに初版の影響が強いといわれる所謂「生物学的一元論」、ないし広義のダーウィニズムについては、人間を生物と同じレベルのものとし、かつ、血まなぐさい闘争を肯定するものとして、いままで批判の対象だった。しか

し「生物学的世界観」に批判的な「人間主義」、ないし「ヒューマニズム」の一部にも難点がある。そこでは、自然よりも人間を優位におき、文化をもつ人間のわがままを許しやすい点で、自然破壊の原罪をひそめている。

地球環境の深刻化した現状では、自然と人間とを一つの系とみる「生物学的世界観」における視点こそ、もちろんむずかしい条件つきではあるが、むしろ斬新というべきかもしれない。環境保全を求め、「地球ファミリー」を願う新思考にとって、ダーウィニズムから学ぶべきことは少なくない。

V. ダーウィンにおける裂目

1831年、ケンブリッジ大学神学部を卒業した21才のダーウィンは、学生時代からの博物学への興味すてがたく、観測船ビーグル号に上船、まわりの反対をおし切って、5年間の世界周航にでる。各地で観察した資料こそ、この偉大な学説が成立するもとなった。式辞では、ダーウィンのように大きい夢を実現する積極性がとくに若人には要請される、とつけ加えた。

ダーウィンはすでに大学在学中から、フンボルト(A. von Humboldt)の、人間を含む自然界に美しい調和を求めようとした中南米学術調査に魅せられ、またバイロン、ワーズワース、シェクスピアなどの詩や文学に興味をもち、航海中もミルトンの『失樂園』を手ばなさなかったという。したがって、彼の航海記『ビーグル号航海記』には、自然の観察だけでなく、ヒューマンな挿話も多く、場所の全体をえがくという総観的視点が生きている。

『種の起原』において彼は、いろいろな場所(place)における人間を含む生物界のいとなみをeconomy of natureとみることによって、画期的な学説を樹立するのに成功した。しかしeconomy of natureという以上、生物自体に即すべきで、人間サイドの喜怒哀楽はすてなければならぬ。科学特有のきびしさであろう。

ダーウィンは帰国して30才すぎから、生物進化についての資料整理とその理論構成に本格的

にとりくむ。もっぱら生物の客観的観察をもとに、きわめて実証的な分析に没頭した彼は、いきおい文学や宗教などの人間的なものから離れることになった。『自伝』には、こう書かれている。

「私は最近シェクスピアを読もうとしたが、それは耐えられないほど退屈で、吐きけをもよおしそうなくらいであった。」「私の心は、事実の大量のよせ集めをときほぐして、一般法則をつくりだす一種の機械になってしまったように思える」

彼にとって、30才以前とは趣向が変わるほどの大きい変革だった。こうした苦闘のあげく、40才にして『種の起原』が誕生した。

たしかにダーウィンは、宗教や文学を拒否けて、徹底して生物のありのままの世界に没頭していった。にもかかわらず注目をひくのは、彼の「進化論」の背後に晩年まで、人間らしい思惑や願いがまとわりついていたことである。

「私の判断するところでは、幸福が決定的にすぐれたものとすれば、その幸福は、われわれが淘汰から期待しうる効果とよく調和する。」「知覚をもつすべての生物は、一般的な規則としては、幸福を楽しむようにつくられてきたという信念にいたる。」また、「われわれがどこでも出会うかぎりなく美しい適応」という文学的表現もある。

以上の文中にでてきた「幸福」「淘汰」「調和」「適応」「信念」——いずれも人間くさい、それだけに多義的で、あいまいな言葉である。こうしたあいまいさが、あの徹底した実証研究の背後にまで、どうして忍びこむのだろうか、と問いかけるところから、大学らしい真理の探究がはじまる。

VI. 第2の「大航海時代」

ダーウィンの諸概念には、20世紀科学の立場からみると、たしかに擬人主義的側面がまじるが、それ故にかえって、全自然の輪の中に人間現象をたやすく抱きこむことができた、とはいえないだろうか。そのこととかわかって、彼の

economy of nature には、19世紀前半までの古典地理学が基本原理とした「有機的自然観」につながるものをひそめている、と考えたくなる。大学時代、エジンバラ大学医学部からケンブリッジ大学神学部に転じた彼は、上述のようにフンボルトの影響を強くうけた。両人の考え方が、いずれも今日の生態学につながる点からしても、こうした可能性は濃い。

こんなことを考えている折柄、世界の二極構造が急変した。平成3年の卒業式では、18世紀後半のフォルシュター(G. Forster)と、その感化をうけたフンボルトを「大航海時代」の最終段階(18世紀後半～19世紀初期)という視点からとりあげた(奈良大広報、平成3年卒業式号)。

いまや「大航海時代」以来つくられてきた西欧中心の既成概念や行動規準が崩れ、既知の世界がテラ・インコグニタに押し戻され、流動化する世界をあらためて再認識、再発見する必要が生じた。まさに第2の「大航海時代」の到来である。

功罪あわせもつ「大航海時代」は、いまから500年前、15世紀末のコロンブスのアメリカとの出会いにはじまった。苦難にみちた冒険時代が終わりに近づいた18世紀後半ともなると、航海は学術調査の性格を強め、少壮学徒の参加が目立つ。ダーウィンに先がけて、彼らが危険をおかし、未知なるものを追い求めた青春の、苦しい、しかし一途な足跡には、範とすべきことも少なくない。その功績を第2の「大航海時代」に船出する卒業生諸君にささげることにした。

クック(J. Cook)によって行われた第2次太平洋周航(1772～75)に参加した学者に、ドイツ人のフォルシュター親子がいた。息子のゲオルク(Georg)はときに18才。少年のころからリンネ(C. Linné)やビュッフオン(G. L. Buffon)の生物学を修め、体系をもつ全体として自然を観察するすぐれた才能にとどまらず、さらにポーランド、ロシア、イギリスでの外地生活から、豊かな国際感覚を培っていた。帰国後英語で出版された周航記は、イギリスでは外人の紀行文として評判が悪かったが、その後のドイツ語版は

ゲオルグの補訂を加え、ドイツで高い評価をえた。

ドイツ語版『世界周航記(*Reise um die Welt*)』の圧巻は、南太平洋のタヒチ島の観察である。そこには、ニュージーランドの「素朴な混乱状態」と比べて、タヒチの魅力的なしくみがたくみに綴られている(「フォルスターの世界周航」NUGA12-3)。

「小屋の前には、住民たちが、……一緒にのどかなおしゃべりの時をすごしたり、休んだりしている。……私たちについてきた住民たちは、私たちが植物を採集するのに気づくと、大変熱心に同じものをつみとり、運んでくれた。……美しく乱れた自然の中に無数の野生の草木が育つ。それらは人工農園以上のもので、木影に生育するので、とくに水々しく柔らかい品種であった」

パンの木と多数のヤシの木のかげに吹きぬけの民家が並んだタヒチ特有の自然と、そこに住む住民たちの、「ローカルなしくみ(lokalte Verhältnisse)」と「人間の面白さ(Interesse am Menschen)」とが注目される。「ローカルな関係」とは、野生の食べものにめぐまれた常夏の気候のもとでの「贅沢この上ない怠惰(tüppigste Untätigkeit)」とでもいった、のんびりした豊かさである。

こうした「ローカルな関係」のもとでの「人間の面白さ」としては、例えばタヒチの儀礼の饗宴において、もっぱら食べる役割を果たすものと、食べる者にもっぱら奉仕する人びととの間に、きちんとした作法のあることをあげ、それはヨーロッパの上流社会にみられる食客と奉仕者との関係によく似ている、という。

こうしたこまかい現地調査をもとに、フォルシュターは、かつてルソーが机上に夢みた「平等な自然人たち」としての原住民のイメージを幻想として遠ざけるとともに、西欧中心の「人類文化の進歩」の図式をも否定する。西欧文化を最高の文化とみる白人のうぬぼれを難じて、時代思潮を地理学的発想でリードしたフォルシュターの姿勢は、後述する「自然の哲学者

(Philosoph der Natur)』ヘルダー(J. G. Herder)の「風土論」とも関連が深い。

VII. 『下ライン考』

カッセルの地理学教授の経験をつんだG. フォルシュターは1790年、若いフンボルトを伴って、マインツからライン下りの旅にでる。旅は、先進的なオランダ・イギリスをへて、フランス革命のバリで終わった。西欧の心臓部について論じたその紀行書『下ライン考(*Ansichten vom Niederrhein*)』は、文明論をおこなった哲学的エッセイとして、すでに親交のあったヘルダー、ゲーテ、シラー、ヘーゲルなどの賞賛をえた。当時のフォルシュターが、ゲーテの『ヴェルテルの悩み』を愛読していたのは、いうまでもない。

所謂未開と文明との2つの紀行書を完成したフォルシュターを介して、地理学と哲学・文学とのパーソナルな知的ふれあいが始まり、その交流は後述するように、古典地理学に無比の豊かさをもたらすことになる。

フォルシュターは、当時まだ封建諸領邦に分裂していたドイツを念頭におきながら、各地方のグローバルな経済的盛況と科学の隆盛との関係について、印象深い洞察をこころみている。アムステルダム的事例を示そう。

「私は港の中央で思索に身をゆだねて、ヨーロッパ各地からきた多数の船団を左右にみる。アルクマールとエンクヒーゼンへとひろがり、他端でテクセルの入江をつくる海岸を一望すると、波止場やドック、倉庫、工場、見通しのきかない岸を斜めに、路上や運河の上のやかましい蜂群のような雑踏、ジューダーゼー上の多くの帆船やボートが、魔法のように動いている」

「まわりには数多くの風車の休みない回転、なんともいいようのない生活、一見してなんたる広大さ！ 通商と航海が、非常に多くの科学を抱きこみ、その目的に役立てているが、それらはまた、幸いにも、くりかえし完全さへの助けともなる。あくなき食欲さが、数学と力学、物理学、天文学、地理学の母胎となった。理性は、完成に身を投じた努力に高利を支払う。そ

れは、遠い世界各地をたがいに結びつけ、諸民族を一体化し、さまざまな地方すべての生産物を蓄積し、そこでたえず豊かさの考え方をひろげる。……ここでつねには加工されないものも、新思考によって、近くの諸地方に原料としてもたらされ、そこで大量の既存の実学とおりあわされて、おそかれ早かれ、アムステル海岸に理性の新製品となって帰ってくる」

「この事実こそは私にとって、対象自体は個々に分岐して小さく、つまらぬものにみえても、これらすべての、一全体に統合されるかぎりなく多様な対象(Zu einem Ganzen Vereinigten Gegenstand)についての全印象(Totaleindruck)となる。もちろん全体なるものは、現存在(Dasein)をつくりなし、それなくしては最賢人にとっても、誰よりも仕事熱心なものにとっても、うたかたの夢にすぎない」

ヘーゲルが「石橋の哲学書」とほめたように、ここには、「一全体としてのアムステルダム」の現存在が、独特の筆致のもとでみごとに全貌を示す。

VIII. 「自然考」

こうしたフォルシュターの総観的なものの見方、考え方に啓発された青年フンボルトは、フォルシュターの太平洋周航から20年余りたった1799年から4年間、中南米熱帯地方の学術探検にでる。各地の自然と生活との比較考察をとおして、「いろいろの力が調和しながら共働しているしくみの洞察(Einsicht in das harmonische Zusammenwirken der Kräfte)」をめざす。

「地表の調和」とは、もちろん人間本位の調和ではない。人間をも一要素とみる自然界全体のつりあいである。「自然はどこでも、固有の性格と形相(Physiognomie)をもつ」という考え方は、後日の「コスモスイデー」にまでつながる。今日のみでみると、共存や相互関連と調和・不調和の区別、全体なるものの地理的单元などが、かならずしもはっきりしないが、少なくとも全体にアプローチしようとした俊才の姿勢には、1960年代以降の、全体と個の相互規定性を無視

した「全体性」批判にはない、珠玉のような慧眼が、いまでも光っている。

彼の文学的作品ともいべき『自然考(*Ansichten der Natur*, 1808)』所収の「ステップと砂漠から」をとりだしてみよう。

「豊かにみちあふれた有機的生活から、樹木のない、植生に乏しい砂漠の荒々しい縁辺にあらわれて、放浪者はうろたえるものである。はかることもできない空間の中には、丘も、崖も、島状にそびえたつてはいない。表層が200平方マイルもある砕けた地層が、あちこちに、まわりよりも目立って高まっているだけである。住民たちは、この現象を「長椅子」と呼び、同時に予感にみちた言葉で、事物の古い状態を特徴的に語って、いずれも高所は州、ステップ自体は大きな内海ともいべきところであったとみる」

「いまでも暗い錯覚が、時々こうした前史のイメージをよびおこす。明るい星座があわただしく昇ったり、沈んだりして、平地の縁を照らしたり、波立つもやの下層の中でそのイメージが二重にふるえるとき、ひとは、眼前に岸辺のない大洋があるかのように思いこむ。このようにステップは、無限感の気持をみだし、また、空間の感覚的印象を失ったかのようなこの感情によって、より高い秩序へと高まるような刺戟のある気持をみたすものでもある」

こうしたユニークな前提に立って、彼は各大陸の多彩なステップと砂漠と、そこに展開した多様な人間史とを大局的に比較考察する。アジアの、ときに山脈のトウヒ林によって切断されたステップと、リヤノスやパンパの単調なステップとのちがいを、アフリカと南米間の、地形の表面的な類似と気候や植生の大きいちがいなどと、諸民族の生活や移動、盛衰との歴史的関係に言及するとともに、新大陸への白人植民の影響などにも注目する。

「ここで大たんに、ステップの自然絵画(Naturgemälde)を書き終えることができるであろう。しかし、大洋上にあつて、はるか海岸のイメージに好んで幻想をめぐらすように、われわれはまた、あらかじめ大平原が消えうせる前に、ス

トップを限る地平をしばし眺めるものである」として、ステップを限る砂漠や山脈が、諸民族の文化・生活・言語などをわかつ役割を述べた行文は、最初の引用とあわせて、とくに印象にとむ。

しかしステップと砂漠の結論は、抽象的で難解、式辞の素材にはふさわしくないが、「フォルシュターの精神」の継承をくみとるために、ここではあえて、さわりの断片だけ引用したい。

「こうした大がかりで粗野な自然の中に、多様な人間集団が生活している。おどろくばかりにちがう言語に分裂し、あるものは遊牧的で農耕には縁がなく、……他のは植民して、みずから努力してえた作物を食料として自立し、よりこまやかな慣習をもつ。広大な領域に、……人間ではなく、バクと群居を好む猿だけが住んでいるところもある。この荒野にも、かつてはもっと高い文化があったことを、岩に刻まれた絵画が証明する。これは、諸民族の運命の交替を示し、また不つりあいに発達した、変わりやすい言語といかに関係するかについての証拠にもなる。その言語は、人間最古の、はかない歴史の記念碑であるが」

「かくて最下位の動物粗野の段階にある人間は、以上のように、みかけだけ輝く、もっと高い文化のもとでも、いつも苦勞ある生活をしられるものである。広い土地をこえ、海陸をこえ、歴史学者のように全世紀を通じて、放浪者につきまとうのは、仲たがいの種族の、単調で希望のないおもぎしである。」

しかし、俊秀の目は、局所や地表にとどまることなく、「フォルシュターの精神」をこえて、コスモスの「調和」にひらかれていく。

「したがって、民族間の荒々しい係争中において精神の安らぎを求めるものは、植物の静かな生活や、内的作用のある聖なる自然力(Naturkraft)を好んで凝視する。あるいは、数千年來人間の胸中にもえたった天性の衝動をすてて、妨げられることのない調和(Einklang)をなす古い、永久の運行を完成している高い星を、予感をもって仰ぎみるものでもある。」

IX. 日本の北辺

「大航海時代」終末期の若い俊秀たちに伍するにたる活躍が、幕末の日本でもみられた。このことを式辞では、船越昭生『鎖国日本にきた「康熙図」の地理学史的研究』によって付言し、この島国の西欧化に注目した。

「大航海時代」が進むにつれて、世界の海陸の輪郭は徐々に明らかになったが、しかし19世紀初頭までなお不明の点を多く残したのが、氷海におおわれた日本の北辺だった。すでに17世紀中葉、フランス人ド・フリース(De Vries)が日本東岸を周航して、ウルップやエトロフ島、サハリン東部のテルペニエ岬を発見。中国でも康熙帝治下、西洋イエズス会士たちによる中国全土の測量が行われた際(1708~16)、沿海州対岸についても、原住民からのヒアリングによってサハリン海岸線の想定がなされたが、きわめて不正確なものだった。その後、ロシアのベリング(L. Behling)によって2回にわたる探検が行われたが、サハリンは不明に残された。クックも最後の航海のとき日本近海まで到達したものの、成功はしなかった。つづいてフランス人ラ・ペルーズ(La Pérouse)によって、宗谷海峡が確認されたが、以北のサハリンは依然不明であった。

なお、植物研究を志した20才代のフンボルトが1780年前後、ケンペル(E. Kaempfer)やツンベリー(C. P. Thunberg)の日本紀行に刺戟されて、植生にとむこの島国への渡航を企てたことがあった。これは実現しなかったが、後の中南米探検の動機となる。

日本側でも、北辺の地図像を確立するために、千島・サハリンの探検調査が独自に進められた。サハリンについては、1808年の間宮林蔵によるサハリン踏査が画期的で、対岸に渡航して、サハリンの島であることが初めて確認された。フンボルトの『自然考』が出版された年のことである。

間宮の著書『東鞆紀行』によると、探検ルートに沿う住民たちの家屋や生業、交易の状況、

陸上の積雪にもかかわらず、海上は結氷の気配のないこと、対岸の黒竜江沿岸との間に住民の往来や商業のあること、黒竜江岸の拠点で清朝の役人が住民の貢物をうけとっていることなど、大陸とサハリンが、北方独自の生活文化圏を形成していたことについて、現地調査は詳細をきわめた。

さらに彼によって、世界で始めてリアルなサハリン島の地図が作成されたことも、特筆に値する。当時サハリン周辺を回航したロシアのクルーゼンシュテルン(I. F. Kruzenshtern)も、間宮作成の地図を知って、「これは日本人の勝ちだ」と叫んだという(P. F. B. von Siebold's Report)。

西欧の学術調査に呼応するかのようには、日本において地理的知識がさらに完成の度合いを深めるについては、あのアムステルダムにみられたようなオランダ学の導入と展開があった。

まず、伊能忠敬が日本全土の精密な実測に成功したことをあげねばならない。つぎに、「親視実測」をめざす高橋景保らの若手専門家グループが、内外の断片的な北方情報をつなぎあわせて検討総合し、当時としては最も実証的で正確な北辺の地理像をまとめ(『北夷考証』)、さらに当時最新といわれたイギリスのアロウスマス(A. Arrowsmith)の世界地図をしのぐ『新訂万国全図』(1810)を完成したことがあげられる。

その後来日したシーボルトから最新の海外情報を知りたいばかりに、上述した日本側資料をシーボルトに提供した罪で39才の命をたった高橋の悲劇があるが、一方、サハリンをはじめ、日本側の情報はシーボルトレポートの形でドイツに送られ、フォルシュター以来の古典地理学を集大成したリッターの『地理学——アジア篇』に収録された。たとえば間宮の発見した「間宮の瀬戸」も、リッターに初見することに注目したい。

X. 有機的自然観

「外野席」からとはいえ、地理学の本質や動向に言及しようとするかぎり、文脈の一部は、

当然、学生相手の断片的なスピーチの筋とはちがってくる。

さて、古典地理学其自然観は「有機的自然観」とよばれ、人間をも包みこむ「全体としての自然」を「生きた自然(lebendige Natur)」とみた。その自然は本来、「必然的ななりゆき」を内包し、ことの本質や根源に通じるとされ、その「自然のシステム(natürliches System)」に要素相互の調和や共生が期待される。

期待をみたすに十分な概念の整理や科学的操作の確立には至らなかったが、こうした考え方は、産業革命が徐々に進展したとはいえ、まだ地表上に安定がみられた前世紀までの、自然回帰の願望に通じるだけでなく、日本や中国などの伝統的自然観とも共通点が多いところからして、地理思想史上、重大な意義をもつ。

「生きた自然」のしくみこそは、「大航海時代」最終期の学術探検が、上述のようにフィールドでの発見につとめたところであった。そこには、いまなお未解決の問題が残されているとはいえ、その哲学的結晶の一つを、フォルシュターとも交流のあったヘルダーから引用する。

「人間の技術が、森を伐採し、土地を開拓できるからといって、人間の狭い、みだらな心をもって、他の大陸を一種のヨーロッパにたやすく改変できるなどと考えてはならない。というのは、生きとし生けるものは、すべて相互関連のうちにあるもので、この関係は慎重にとりあつかわないと、改変などできるものではないから」(Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit.)

これこそ、古典地理学の公理というべきもの。今世紀以降、至宝のようなこの公理にそむいて、自然と人間を対極にすえる考え方が、病める現代の悲劇を招いた。近代西欧に特徴的な「自然決定論」、あるいは「自然克服」や「自然管理」の立場をこえて、古典地理学への新時代にふさわしい科学的回帰が要請される所以が、ここにある。

いまネオ古典地理学への鍵を既述の中に求めて、もう一度、古典的思考をこえたといわれる

ダーウィンをふりかえる。彼は、フンボルト流の自然をさぐる操作概念として、不十分ではあったが、「生存競争」「淘汰」「適応」などを先駆的にあみだしたとみなしたい。これこそ、ドイツ流の学問とイギリス流の科学との結合の一典型であった。ダーウィン説をうけいれたラッツェルの場合、全体（例えば、大地と民族）にアプローチする操作概念を、よりすっきりした「運動」「位置」「領域」「狭義の自然」にくみかえ、とくに晩年にはリッターを継承して、さまざまに限界のある「領域」の諸相をみつめたのが、名人芸にひとしい古典的思考を現代科学につなぐものとして示唆にとむ。若き日のラッツェルに影響を与えたソフトな進化論者ワグナー(M. Wagner)が、早くフンボルトやリッターの思想に傾倒していたことも、三思しなければならない。

それはともかく、フォルシュターやフンボルト、リッターなどの見方は、同時代のヘルダー哲学やゲーテ文学に共通した流れとも深く結ばれていた。いずれもローマン主義の「疾風怒濤(Sturm und Drang)」の流れに棹さした巨匠たち。年齢は年長順に、ヘルダー・ゲーテ・フォルシュター・フンボルト・リッターとならび、それぞれ5～10年間隔。

彼らの動静ははなやかで、万人の感動をよぶ。それは日本の地理学界が、わずかに明治の福沢諭吉・内村鑑三・志賀重昂らの活躍を除いて、ついに経験することのなかった豪華絢爛の時であり、学長式辞といわず、各方面にエピソードにとんだ話題を豊かにわかす。

例えば、ゲーテ晩年の秘書だったエッカーマン(Eckermann)に『ゲーテとの対話(Gespräche mit Goethe, 1836～48)』がある。26年12月のこと、「ゲーテはひどく興奮した調子で私に向かって語った」として、次のようにフンボルトについて記されている。

「今朝、アレクサンダー・フォン・フンボルトと数時間一緒だった。男一匹、これはなんたることか！ 長年フンボルトを知っているのに、新しい面には驚かされる。彼は、知識(Kenntnis)

と生きた知慧(lebendige Wissen)とは別のものと考えているとあってよい。それに、私には同時にはできないほどの多角さ！ 人が動きまわるところで、彼はじっと家にいるのに、精神的な豊かさをあびせかけてくる。彼は多数の細流のある泉のようなものだ。その細流のもとで、人はいつも、もっぱら桶で水をくむ必要があり、かつ水はつねにこちらに向かって、さわやかに、つきることなく流れくるといったところだ。彼は2、3日はここにいるのだろうが、私には一年がすぎるように思われる」(1826,12)

地理的思考にもすぐれたゲーテは、若いころ、「風土論」や「言語起原論」を提起したローマン主義の先駆者ヘルダーから多くのことを啓発された。平成3年度の入學式では、学生時代のゲーテと少壮哲学者ヘルダーとの出会いをとりあげてみた(奈良大広報、平成3年入學式号)。資料は、ゲーテの自叙伝『詩と真実——わが人生から——(Dichtung und Wahrheit, Aus meinem Leben)』による。

XI. ヘルダーとゲーテ

青年ゲーテは、ドイツ東部のライプチヒ大学に入学。しかし、小パリとよばれたこの地の、知的偏重とうわべだけの雰囲気に行きづまり、学業半ばで郷里フランクフルトに帰って英気を養う。やがて青春の情熱とやる気を取りもどして、1770年、南のストラスブル(当時はシュトラスブルク)大学に転入学。

この町をとりまくアルサスは、ドイツ的なものとフランス的なものとがとけあった、豊かな歴史的風土である。

「私は、しばらくの間生活することになった美しい土地を目の前にみた。美しい市街。よく繁った樹木が一面に縞模様となった広い郊野。ラインの流れに沿った草木の豊かさ。……全体が白紙のように自分の前によこたわっている」

ゲーテは文学だけでなく、アルサスの風土に抱かれた古い文化財や民俗、町なみなどにも関心をもち、さらに後年には、外界の自然の形(Morphologia)や色彩にまで温かい目をむけるこ

とになった。彼の考え方の奥には、地理学的な
枠組みが育つ。

一介の文学青年とはちがうゲーテ特有の広さ
と深さが成長するについては、まず交友関係の
広さが目をひく。医学部にも多くの友人ができたし、彼自身、化学や解剖学の講義もきいている。医学の臨床講義にも出席し、「垣間みるにひとしい専門外の学科をひとしお面白く好ましく思った」と記している。

しかし、ストラズブルにおける「ゲーテの開眼」に格別大きな力となったのは、5才年上のヘルダーとの出会いであった。「図書や器具はなくても、自然から哲学することを習った哲学者」を自称し、「広い洋上のマストに立って、空、太陽、星、月、空気、風、…魚、海底について哲学した」というヘルダー(*Das Meer: Journal meiner Reisen im Jahr 1769*)との出会いを、ゲーテはこう書いている。

「私が問いかけ、また答え、あるいはその他の形で話をするにしても、いつもその話は重要なものであったから、私はヘルダーによって、日に日に、いな時々刻々に新しい見解へと、おし進められずにいなかった。…私が熱心に求めれば求めるほど、いよいよヘルダーは惜しげなく与えた」

ここで私は、新入生たちにとってなによりも重要なことは、よき師、よき友にめぐまれ、より高く自己を自主的にひきあげることでであると強調した。

さて当時のヘルダーは、いろいろなことをゲーテに与えた。ここでは彼が、<人間の言語がどうして成立したか>について考え、『言語起原論』を仕上げたことに話をしほりたい。「はじめにことばありき」の世論が、いまでも一般的には有力だから。

すでにゲーテは、当時多くの言語を修得していた。

「私は、……あまりにもまだ事物の唯中にかこわれていたので、「起原の問題は、私にはむしろ無用に思われた」

そうした状況のところ、ヘルダーの『言語

起原論』を読んで、ものの根源に迫る姿勢を自覚する。

「ヘルダーの論文は、どうして人間が、……自分の力によって、ある言語をもちうるようになったか、また、もたねばならないかを示そうとしたものであった。私はその論文を非常に面白く読み、それによって大いに力づけられるところがあった」

このようにゲーテはヘルダーに「大いに力づけられ」て、物事の表面ではなく、深く「物事の自然(本質)」に迫る姿勢を学び、やがて「疾風怒濤」の文学運動をへて、「ゲーテ時代」といわれる輝かしい時代をつくりだしたのであった。「大航海時代」最終期と呼応する意味をもう一度かみしめて欲しい。

XII. 『若きヴェルテルの悩み』

ゲーテ文学の始発点には、『若きヴェルテルの悩み』(1774)があり、すでにそこでも「生きた自然」が躍動している。文学には縁遠い現代学生たちも、この辺の紹介では腫が光る。

ヴェルテルをめぐる自然の動静は、地理学にとっても鮮烈である。文学の先人たちの名詠をさけて、あえて拙訳で例示しよう。

「よろこびにあふれたその『生きた自然』についての、心のなかにあった全く温かい感情が、まわりの世界を一面の楽園にしたものだったが、それがいまではたえがたい責苦となり、道すがら私につきまとう精神的苦悩となる」

「かつて私が、岩壁から流れをこえて肥沃な谷のある丘をみおろし、まわりの万物が芽生え、ふきだすのを眺めたとき、また、流れから頂上まで高く繁った木々でおおわれ、多様なカーブをえがくこの上なく好ましい森陰の谷を眺めたとき、それからまた、鳥たちが森をよみがえらすのを聞き、夕方の赤い陽光の中で無数の蚊の群れがおどり、ひらめくような最後の閃光によって、ぶんぶん鳴くカブト虫が草地からとき放たれ、またそのまわりでは、鳴き虫と巣づくりの虫が地上で目をひらき、荒々しい岩壁でなんとか生きている苔類や、乾いた砂丘のもと

に成長した叢林が、もえるような、内からの『聖なる自然の生命 (heilige Leben der Natur)』をあらわしたとき、いかに私が温かい心にすべてを抱えこんだことか、そのことによって信仰心がみちあふれ、かぎりない世界のみごとな形象 (die herrliche Gestalten der unendlichen Welt) が、生き生きと私の魂の中でゆれ動いたことだろう」

いままで名訳で読みながしていた内容を、原文をおって拙訳してみると、既述のようにヘルダーと親交のあったゲーテらしい「生きた自然」の省察の、人間学的意味の広さと深さ、すばらしさが、一言一句にこもるのがよみとれる。人間は自然に問いかけ、自然は人間に答える。その問答は、ときとところによって明暗をかえる。「内なる自然」と「外なる自然」との不一致も、意味深い。

「恐ろしい山地が囲み、絶壁が眼前に横たわり、その下を白糸のような瀑布が流下し、足下には小川が流れていた。森と山が鳴りひびく。私は、それらが互いに作用し、大地の低地のもとで、すべてはかりがたい力をつくりなし、多彩な創造物の群れ (die Geschlechter der mannigfaltigen Geschöpfe) が地上と天空の下にうごめいているのを眺めた」

「すべては無数の形象をおびて群がり、人間は家屋にしっかり集住し、その好みに応じて広い世界をすみなし、支配する！あわれな愚者よ！汝は小人なる故に、すべてを価値に乏しいものとみなす。通りぬけのむずかしい山地をこえ、小川のない荒地をすぎ、未知の大洋の涯に至るまで、久遠の創造精神が吹きつける中で、自分を知り、自分のために生きる、さまざまな人間のよろこびがある。当時、私をこえて果てしない大洋の岸まで飛ぶ鶴の翼をかりて、無限のものをいれた泡立つコップからもりあがるような生命のよろこび (schwellende Lebenswonne) を飲み、私の胸のはりつめた力の中に本質のもつ至福のしずく (ein Tropfen der Seligkeit des Wesen) を一瞬でも一滴ふれたいと、なんとしばしば渴望したものだろう。そのしずくは、どれ

もそれ自体の中に、それ自体をとおして生じるものなのだが」

XIII. ネオ古典地理学への道

若い日のゲーテをリードしたヘルダーは、言語の起原について考えるとともに、他方では人間史の基底にある「風土 (Klima)」について論及した。彼にとっては、「多様な音を奏でるカミを宿した自然全体が、言語の女教師であり、ミューズなのである」から、実は「はじめにところありき」であったとみななければならない。「風土」について、彼はこう述べている。

「土地の高低、その性質、産物、飲食物、生活様式、労働、衣服、すみか、娯楽、技芸、その他生きるきずなどとして役立つさまざまなもの、すべては風土のえがきだしたもの (Gemälde) である」

したがって、「生きた自然」のシステムこそ、まさに風土的 (Klimatisch) であろう。風土を気候に矮小化するとき、古典地理学は壊滅する。

上述のヘルダー、ゲーテ、フンボルトなどの名人芸をしっかりと踏まえながら、当時の時代思潮の3本の柱、カミと人間と自然に加えて、はじめて大小の場所 (局地 Lokalität, 地方 Land, 大陸 Erdteil) を積極的に提示し、その場所をみたく個々のもの (Einzelne) の群化と共生上の、特徴ある現象についての「より一般的な叙述」と「法則樹立」をめざして、近代地理学の体系を創始したのが、ゲーテより30才、フンボルトより10才若いリッターであった。その古典地理学の集大成については、拙稿「リッターをめぐる人びと」(地理, 24-4) をみられたい。

リッターもまた、地理学方法論を比較言語学と比較解剖学のレベルに科学的に高めようと努めた。これこそ、私が「外野席」に移る以前の基本的なよりどころでもあった。もう一度地理学プロパーに復帰できたらと願いながら、リッターをめぐる思いは尽きない。リッターの「自然になりし秩序 (Natursystem)」,それが地表に展開した「諸地方の秩序 (Ländersystem)」,その具体的な型ともいふべき「地理的個体 (geogra-

phisches Individuum)」、その個体も、「その本質をよく示すところ」と「漸移的な周辺」とに細分されること、さらにその研究法の本質などについて、20世紀の実証地理学が、ゆがんだ近代思潮に蚕食されることなく、もし正しく継承していたならば、現代の地球の「保全」と「破壊」、地表の「調和」と「不調和」をめぐる一連の「複合的事実」を解明するための厳密な操作概念も、既述したラッツェルのレベルをこえて確立していたにちがいない。

変転つねない現代地理学の雑多な流行や、全体か個かの不毛な論争をおいかけるにとどまら

ず、近代の始原ともいべき古典地理学にさかのぼって、第2の「大航海時代」にふさわしいルーツを省察すべきだと、「外野席」の地理学者はひそかに思う。

この際、「全体の中で個を」、「個をみつめながら全体に」と指摘したリッターの弁証法はもちろん、20世紀地理学が確認した「段階を踏んで(stufenweise)全体に迫る」方法論や、地理的素材を「精神の外化」としての「地表に属するもの」に限定した景観論の本質に日夜とりくんだ往時を、なつかしく思いだす。

(奈良大学)

TOWARD THE NEO-CLASSICAL GEOGRAPHY

Ichiro SUIZU

This article aims to find the present meaning in the thoughts of classical geography from the latter half of the 18th to the end of the 19th century.

The ideas of classical geographers, G. Forster, A. v. Humboldt and C. Ritter were firmly connected with the main current of thoughts presented by J. G. Herder, W. Goethe and etc. All of them tried together to create the splendid and romantic age of "Sturm und Drang", which has never been experienced by the modern generations since then.

Their scientific investigations and intellectual exchanges between them could be explained through texts of "Reisen um die Welt" and "Ansichten vom Niederrhein" by Forster, "Ansichten der Natur" by Humboldt, and "Gedichte und Wahrheit" and "Die Leiden der jungen Werthers" by Goethe and so on. Moreover, the author tried beyond the existing image to find the new one of Ratzel's way of thinking based upon his biography, "Glückinseln und Träume".

The classical geographers of romanticism led the idea of "organic whole of nature" and "living nature", different from the concepts of nature in the modern sciences, which give a fine hint to recover the harmony of present globe. But it is not enough for them before C. Darwin to show the operational concepts in a scientific sense to analyse a whole.

That is the reason why the Mediators between the classical and the modern geography should be tried to find. It is noted that the mediators could be found in Darwin's economy of nature followed Humboldt's idea, and in "Boden und Völker" of Ratzel's geography influenced by both of Darwin's and Ritter's ideas. The former has the operational concepts, "struggle for life", "adaptation", and "natural selection", to resolve the economy of nature, and the latter has the more refined concepts, "movement", "geographical position", "space", and "nature" in a narrower sense, to approach to a whole.

It is one of the ways toward the neo-classical geography to overcome the dualism between nature and culture in the modern geography.